



「見たり、聞いたり、探ったり」No.288

通算 No.439

青木行雄

高知県(雲の上の町)

梼原町(ゆすはらちょう)と隈研吾(くまけんご)

2023年(令和5年)8月7日、日刊木材新聞に7月4日付にて林野庁長官に就任した「青山豊久」氏が横顔欄に記載された。

花粉症対策に取り組む林野庁長官「青山豊久」氏と紹介があったが文面の中に「1990年(平成2年)に高知県梼原町に2年間出向したが、当時の農業構造改善事業で建築家の隈研吾氏に交流宿泊施設を作ってもらった。「これが隈さんの木造建築第1号であり、この事業がなければ国立競技場にはつながらなかったのではないか」聞いてはいたがこの文面に出会い、高知県梼原町に関心が高まった。

また、建築家の「隈研吾」氏が以前は鉄骨構造専門と聞いていた。「国立競技場」にも我が社が納材にかかわりがあったので梼原町に関心がさらに高まり、「東京木材懇話会」(会長伊東秀晃氏)で2023年(令和5年)11月9日、同会の皆様も関心があって研修旅行として実現した。

さらに「高知県木材協会」の会長小川康夫氏まで情報が伝わり、協会の皆様には大変お世話になった。感謝とお礼を申し上げます。

梼原町は町面積の91%を森林が占め、標高1,455mにもなる雄大な四国カルストに抱かれた自然豊かな山間で人口3,200人の小さな町である。四国カルスト高原は、全国的にも珍しい高位高原カルスト地形になっており、至る所に手付かずの自然が残り、晴れた日などには太平洋から瀬戸内海まで一望できるという高原の町である。

石灰岩特有の白い岩(カルスト)が目立つ夏の高原では、里から登ってきた牛たちが放牧されのどかに草を食べている。冬場は一面雪に覆われるが、その景色さえ自然の醸し出す幻想的な美しさがあり、多くの来訪者の人々を魅了しているとパンフに記されていた。

梼原町の成り立ちを調べてみる



四国の道路地図



こんな看板があったので写す。近くに「三嶋神社」があり、坂本龍馬が祈願した所



三嶋神社のすぐ横にこの脱藩の道があった。ジーンとくる山道である。

と913年(延喜13年)津野経高公がこの地に入り、開拓によって津野荘を築いて以来687年間津野氏の所領となり、地域の政治・文化の中心地として発展してきたと書かれていた。

1600年(慶長5年)山内氏の所領となり、梶原6ヶ村、東津野3ヶ村を合わせて「津野山郷」と称し、明治維新の変遷を経て、1889年(明治22年)の、梶原、越知面(おちめん)、四万川(しまがわ)、初瀬、中平、松原の6ヶ村を「西津野村」と改称し、全国屈指の大村として発足した。

1912年(明治45年)村名を「梶原村」と改め、さらに1966年(昭和41年)町制を施行して「梶原町」となり現在に至っているという。

また、町内には日本の夜明けを信じ幕末を駆け抜けた勤皇六志士の墓が残っており、その他にも坂本龍馬や津野町出身の吉村虎太郎たちが脱藩するために通った道が、昔の趣を残したまま「維新の道・脱藩の道」として存在している。杉の大木のあるけわしい山道をぬけていく、坂本龍馬や志士達に関心があり、歴史に詳しい人なら、きっと見て感じてみたい、感動する脱藩の道があった。

幕末の英雄・坂本龍馬は同志澤村惣之丞とともに1862年(文久2年)3月24日、高知を出て、25日に梶原に到着した。その夜、梶原の勤王の志士である那須俊平・信吾父子の家に宿泊、26日、俊平・信吾の道案内により、宮野々番所を抜け、四万川茶や谷を抜けて伊予の国(愛媛)に脱藩した。この梶原が通り道ではあるが、歴史のある三嶋神社に無事を祈願し山道に入る。杉の大木の間を通り抜ける、環境と雰囲気は最高で、当時の志士達の思いがよみがえる。その山道でタイムスリップしながら写真を写し、思いにふける。

## 「隈 研吾」について

建築家・東京大学教授。近作に根津美術館、浅草文化観光センター、長岡市役所アオーレ、歌舞伎座、ブザンソン芸術文化センター、FRACマルセイユ等があり、国内外で多数のプロジェクトが進行中。大プロジェクトの新国立競技場では当社も協力者の一員として大変お世話になった。

この「隈研吾」氏が、この「梶原町」とどうして携わったのか、について調べてみた。

研吾氏の書面を読みながら進めてみる。



## 本人の書面から①

「初めて梶原町を訪ねたとき、長いトンネルを抜けるとパッと別世界が現れたという不思議な感覚を抱きました」という程特別な場所だったようである。

「私は、今後、自分はどんな建物を造ったらよいのか、と悩んでいた。それを払拭してくれたのが『ゆすはら座』であった。」

「地域の人たちの建物への愛情と木造建築の素晴らしさを肌で感じ、自分がやるべきことの答えを見つけることができました」

このように隈氏と梶原町を結びつけたのは、木造の芝居小屋「ゆすはら座（梶原公民館）」。大正時代に流行した和洋折衷様式の流れを汲む貴重な建物であったが、建築から約40年を経た頃、老朽化などを理由に取り壊しが検討されていた。その保存運動に関わっていた高知県在住の<sup>おだにただひろ</sup>一級建築士・小谷匡宏さんが、交流のあった隈氏にぜひ「ゆすはら座」を見てほしいと依頼した。そして1987年（昭和62）に始めて梶原町を訪ねた。

木組みの美しさとそれを成し得た技術に圧倒された隈氏は、「ゆすはら座」の保存運動に力を貸すことを決意する。

そして、それまでに手がけてきた装飾的なモダン建築の対極にあるようなこの建物との出会いは、建



「ゆすはら座」の正面から。修復移転してから30年近くなので外装はかなり古く見える。



「ゆすはら座」の側面から見た。かなり大型の木造建築である。着席で200人ぐらいは入場できるようである。（地元の話）



「ゆすはら座」の天井や内装に感動した。左側の下が舞台で、天井が高い。



「ゆすはら座」の舞台に座る「木材懇話会」の面々。舞台から栈敷席や花道をながめながら感激する会員達。

築家人生の大きな転機となった。隈建築の特徴である「木」へのこだわりは、ここから始まったといわれる。

隈氏を惹きつけたのは木造建築だけではない。梶原町の豊かな自然、そこで暮らす大らかでたくましい人々。この町に魅せられた隈氏はしばしば足を運ぶようになり、町民たちとの交流を深めていった。

## 本人の書面から②

「そして、しばしば梶原町へと通ううちに、当時の町長さんが「公衆トイレを設計してみますか」と声をかけてくれました。施主や職人さんと話し合いながら進めたその仕事が実に楽しくて、それが『雲の上のホテル』に結びついたので。」

「この町は私を初心に還らせてくれた場所であり、仕事で迷いが生じたときにはここで感じたこと、得た知恵を判断基準にしてきました。後に私は梶原町を「物差しのような場所」と呼ぶようになったのはそんな経緯があるからです。」

先に「ゆすはら座」をもう少し説明しておこう。

## 県内唯一の木造芝居小屋

この「ゆすはら座」は1948年(昭和23)に建設された建物で、1995年(平成7)9月に移転復元したものである。この建物は、大正時代の和洋折衷様式を取り入れた建造物で、モダンな外形に花道のついた舞台、2階の棧敷席、天井の木目の美しさがあり、芝居や歌舞伎、映画上映など住民の娯楽の殿堂「梶原公民館」として親しまれている。

1994年(平成6)12月5日町保護有形文化財に指定される。

レトロ的な木造建築物に興味がある人なら、この「ゆすはら座」を見て、場内に入ると、だれもがとりこになる雰囲気があった。すばらしい。公演中ではなかったので1階・2階の棧敷席に座って見る。舞台にも<sup>あが</sup>上って見た。全国にも何館か昔の芝居小屋はあるが、この小屋は規模が大きく、私にも大変魅力的だった。

隈氏に町の活性化に繋がるような建物を造って欲しい……。そんな気運が町民の間で高まり、隈氏は建築家人生で初めて木造建築を手がけることになる。それが1994年(平成6)に完成した「雲の上のホテル」である。梶原町の千枚田や雲からイメージを膨らませた。斬新でありながら周囲の景観にしっかりと馴染む建物からは、梶原町に対する愛情と敬意が感じられる。また、内部の装飾や照明器具には、町在住の手漉き和紙作家であるロギール・アウテンボーガルトさんの作品を採用したという。

「このホテルは『雲の上の町・梶原町』を全国に知らしめるという大きな効果を生み出しました。その成功が次の建物へと繋がったのです」と話すのは、ゆすはら雲の上観光協会の事務局長氏である。

2006年(平成18)には、隈氏の設計により梶原町総合庁舎の建て替えが行われた。外観には、杉パネルをモザイク状に配置。内部のエントランスは組柱と重ね梁により、複雑な木組みとなっている。

2010年(平成22)には「まちの駅『ゆすはら』(雲の上のホテル別館、マルシェ・ユスハラ)」、「雲の上のギャラリー(木橋ミュージアム)」も誕生した。



### 本人の書面から③

「町内の6つの建物は、「木」という共通点がありますが、環境や用途、そして自分の考え方の変化により、それぞれに個性を持っています。たとえば庁舎は、風が吹き抜けるように前面の開放が可能。風が通る空間は気持ちが良く、気持ちの良い空間には人が自ずと集まってきます。」

「図書館は私自身、裸足が好きで、本を読むときは地べたに座って読みたい。寝転がって読むのもいいなと思ったのが発想の原点です。梶原町での経験は、「国立競技場」にも活かされています。屋根を支える集成材は、「雲の上のギャラリー」の木橋で使用したのと同じ30cmの高さがある小さめの集成材。人にとってやさしいスケールのもを組み合わせて屋根を支えることで、心地よさが生まれることを学ばせてもらったからなのです。」

「新しい『雲の上のホテル』は、客室やレストランなどそれぞれの場所にふさわしい景観や居心地を生み出すために、配置を工夫しています。今後、梶原町に足を運ぶ機会も増えそうですから、たくさんの人たちと再会できる日を楽しみにしています。」

隈研吾氏の木造建築物が一同に見られる町はここ梶原町の他にはないと思う。ユニークな木造建築の数々は、すばらしい。例を上げると①最初の「道の駅・ゆすはらの公衆トイレ」、②雲の上のホテル(ホテルは現在取り壊し、新しい計画あり)レストラン、③雲の上のギャラリー、④梶原町総合庁舎、⑤梶原町複合福祉施設、⑥梶原町立図書館、⑦まちの駅「ゆすはら」等、数々の作品を見ることが出来る。  
※このNoは作品に関係ありません。

その内の一部、梶原町立図書館(雲の上の図書館)を詳解すると。(隈氏作品⑥)

梶原町がめざす「人と自然が共生し輝く梶原構想」の中核施設として、2017年(平成29)度に建築された図書館である。

建築には梶原産の木材を活用しており、千百年余の梶原独自の文化を保存・継承し情報の発信基地となることを目指している。館内にはボルダリング設備やカフェを併設し、知の拠点として学びの場であるとともに様々な方々との世代間交流ができる憩いの場、ゆったりと語り合える空間を演出している。

一方で、客室は、時間を忘れゆっくりと過ごすことができるように細部まで計算されたあかぬけた設えになっている。



町立図書館(雲の上の図書館)の外観。中がすばらしい。ボルダリング設備やカフェも併設され何時間もいられそうである。



図書館の内部。ふんだんに使われた木材の図書館。図書館のイメージがまったく違う。



図書館の内部。素足で歩き、ごろ寝が出来て本が読める場所にしたと隈は考えた。

### 「雲の上のギャラリー」(隈氏作品③)

この施設は、森のような建築物を作り、梶原の森の中に溶け込ませたいという思いから始まった。

目指したのは、枝葉が広がり、木漏れ日のような光と影を作り出す建物。日本建築の軒を支える「斗<sup>と</sup>棋<sup>ぎ</sup>」という伝統的な木材表現をモチーフとして、<sup>ほおぎ</sup> 芻木を何本も重ねながら、桁を乗せていく「やじろべえ型芻橋」は、世界でも類を見ない架構形式による唯一の建物として神々しさすら感じられる。

また、梶原産の杉を繰り返し組み上げていくことで、周囲の大自然と調和しながら「梶原の象徴」としての迫力ある存在感も表現しているこのデザインは、まさに木材の限りない可能性と、梶原町産材の振興を進めていく中での大きな可能性と自信をもたらしてくれた。

### まちの駅「ゆすはら」(隈氏作品⑦)

梶原町の特産物販売とホテルが融合したまちの駅「ゆすはら」は、梶原町の顔として、多くの旅人を出迎えている。

施設東側外壁に用いられている茅<sup>かや</sup>は、隈氏が、町内の伝統的な茅葺屋根に学ばれ設計された。茅のファサードは特徴的な景観を生み出すだけでなく、通気性・断熱性に優れるため、自然の力によって快適な室内環境を創っている。また、まちの中の「森」というコンセプトを映すように、施設内には杉丸太の柱を林立させ、森の中を巡るような内部空間を作り出している。

一方で、客室は、時間を忘れゆったりと過ごすことができるように細部まで計算された。

外装の木材は大分色あせてきたが内部は十分に機能をそのまま保っており、十分勉強になった。今後も木材業界人として木材使用建築物が増加する事を期待したい。



「雲の上のギャラリー」1本(何本か集成している)の柱でささえている。



「雲の上のギャラリー」を近くから見る。  
中はギャラリー。



まちの駅「ゆすはら」(マルシェ・ユスハラ)  
梶原町の特産物と販売、ホテルも併設。

令和6年1月7日 記

### 参考資料

木材新聞

梶原町パンフ(町の資料)

聞いた話(関係者)